# 大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.78
2009.5
春

## 特集 ネットノムコウの学術出版

インターネットの現在と未来、そして学術書の現在と未来　岡本真……2
いかにしてITを利用するか　沢辺均……7
学術電子出版の新しいモデル——OCLC NetLibrary　新元公寛……11
大学図書館で電子ブックを導入した意外な理由　矢崎省三……15
社会の記憶を紡ぐ——「納本」の意義　田屋裕之……19

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム
里見弴著『八疊記』　酒井道夫……表2
大学出版部ニュース……22

有限責任中間法人大学出版部協会
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

## 初版本、ナンセンスなフェティシズム

# 里見弴著『八疊記』

酒井道夫（武蔵野美術大学）

背と平の全面空押しが一種異様な雰囲気

「畑違いだから」は言い訳にはならないが、これまで里見弴をまともに読んだことはなかった。ところが時々立ち寄る古書店で、シックな背表紙に惹かれて見つけたのが本書。棚から引き抜いてみると、角背四六判ハードカバーの函入り。背と平の全面に空押しが施されている。一九四二年七月が初版（小山書店刊、購入本は第二版で同年九月刊）。時代を反映して本文用紙は粗末な仙花紙。表紙も和紙らしい風合いに見せているが、決して上質ではない。古書価八百円の値付けだが、函の一部は擦り剥けているし、なかんずく表見返しの角が破れて欠損している。その日は棚に戻して店を出たものの、翌日同じ棚で寂しそうにしていたので購入してしまった。

一九四二年は出版も厳冬時代のはず。乏しい用紙を掻き集めたものらしく、本文用紙の色味が折毎に不揃いで、印刷の刷りムラも激しい。花布も省略。にもかかわらず、造本に気合いが入っているところが却ってやるせない。背と平に粋な題箋が丁寧に貼り込んである。造本につられて通読した。戦況が厳しくなっていく世相下の、市井の暮らしぶりがつぶさに描写されている。そう言えば、私が生後間もない頃の時代相を描いた文章はあまり読んだことがない。儚なげな仙花紙のページを繰って読み進むのが妙にしっくりくる。「気が■った」妻女や女中の行状を執拗に描くシーンなんて、今じゃあ許されないだろう。これって現行の全集等には収録されているのだろうか？

巻末に詳しい著作年表が付されていて、本書は短編小説第十五集に当たる。短編集は一九一六年（第一集『善心悪心』春陽堂刊）以来、ほぼ一、二年置きに刊行されている。この後、戦後の一九四八年になってから第十六集『姥捨』（東京出版刊）が刊行されたらしいが、全巻を元版で読んでみようかなという気分になってくる。恐らく造本環境の変転が手に取るように分かるだろうし、この作家の描写を今どきの妙につやつやした均一なページから読み取っても、行間から何かが抜け落ちていくような気がする。

# 特集

# ネットノムコウの学術出版

学術情報の流通を紙の書籍がほぼ独占していた時代は過ぎ去ろうとしているのか。いま学術出版は、ＩＴの活用を求められ、新たな流通経路への対応を追られ、電子化するユーザを目のあたりにする、「ネットノムコウ」には明日が待っているのだろうか。

# インターネットの現在と未来、そして学術書の現在と未来

岡本　真（ACADEMIC RESOURCE GUIDE）

## インターネットの現在　―普及期の到来

漠然とインターネットに脅威を感じたり、逆に安易に期待を抱くだけでは現状分析も将来構想もできない。そこで、まずインターネットの現在を統計というマクロ視点と、現在人気を博すサービスというミクロ視点で見てみよう。

インターネットの利用者数は、二〇〇七年末時点で九千万人近くに、人口普及率七十％近くに達した。特に指摘すべきは、利用目的と利用形態の多様化だ。インターネットの利用目的は当初はごく一部の情報発信に、次第に情報検索へと広がってきた。そして現在ではショッピングやオークション、金融取引や映像・音楽の視聴、SNSの閲覧・書き込みやオンラインゲームと多様化している。さらに携帯電話の普及によって利用形態も激変した。主流であったパソコンだけからのインターネット利用は全体の十六・七％と少数派となり、逆にパソコン・携帯電話・PHS・携帯情報端末併用でのインターネット利用者が全体の六八％にあたる五九九三万人となっている。[1]

変化するインターネット環境の中で特に利用者の支持を集めているものがある。それが二〇〇四年前後からWeb2.0という言葉で総称された双方向性を特徴とするサービスの数々だ。その最たるものは二〇〇八年末時点で一六三〇万人が参加するソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）のmixi[2]だろう。また参加型百科事典Wikipediaも二〇〇八年十一月時点で月間二三〇〇万人もの利用者を得ている。[3][4]だが、伸長著しいのはこの二つだけではない。はてなブックマーク[5]やYahoo!知恵袋[6]は出版産業関係者であっても知っていていい存在だろう。

## インターネットの学術利用の現在　―2×4分類

では、インターネットの研究利用の現況はどうだろうか。ここではインターネットの学術利用の現在を二つの分類をクロスさせて見ていこう。インターネットの学術利用に関しては、倉田敬子が二〇〇〇年というかなり早い時期に、

①「特定の組織や個人のサイトから、何らかの情報を入手するために利用する場合」（情報入手型）

②「他の研究者たちと情報を共有するためにサイトを運用する場合」（情報共有型）

という二分類を示している。[7] また、筆者は二〇〇六年にインターネットは研究を変えるのかと問い、以下の四分類を試みた。[8]

①「研究の手段を変えるのか」（研究手段）

②「研究の対象を変えるのか」（研究対象）

③「研究の過程を変えるのか」（研究過程）

④「研究の成果を変えるのか」（研究成果）

この二種類の分類をクロスしたマトリックスに基づいて、インターネットの学術利用例をいくつか紹介しよう。

情報入手の手段（1.1.）の代表例は国立情報学研究所が提供するCiNii（サイニィ）[9] だろう。約千二百万件の記事を検索でき、そのうち三百万件の本文が提供されている。情報共有の手段（2.1.）では、ブログに注目したい。ブログによって研究者やその予備軍としての自分の存在を可視化し、集まった注目を業績につなげていく事例も少なくない。たとえば、図書館情報学系のブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」[10] を学部学生の頃に開設した佐藤翔はその好例だろう。

また、加藤哲郎や二村一夫のようなベテランの研究者が研究の過程や成果にインターネットによる情報共有を活かす例もみられる（2.3./2.4.）。加藤は二十世紀前半に海外で活躍した日本人の身元調査という研究過程をインターネットで公開している。[11] 二村は初期労働運動を牽引した人物に関する研究成果「高野房太郎とその時代」を百回に渡って連載している。[12]

| 倉田分類×岡本分類 | | |
|---|---|---|
| 倉田分類 | 1.情報入手 | 2.情報共有 |
| 岡本分類 | 1.1.手段 | 2.1.手段 |
| | 1.2.対象 | 2.2.対象 |
| | 1.3.過程 | 2.3.過程 |
| | 1.4.成果 | 2.4.2成果 |

## 学術出版の現在　―様々なネット活用事例

学術出版の側も手をこまねいているわけではない。一部ではインターネットの活用事例が目立ちつつある。たとえば、ブログの機能を生かして情報ハブ化したサイトを構築している笠間書院[13] はその代表的な事例だろう。

また、前出の加藤哲郎や二村一夫のインターネットでの仕事を学術書として刊行した岩波書店のように、[14] インター

ネット上の学術的営為を元に学術書を刊行する事例も散見される。学術雑誌では、ネット版論文誌『リテラシーズ』[15]を創刊したくろしお出版や、『英語青年』[16]という歴史ある媒体を紙版からネット版へと転換した研究社のような出版社もある。

さらに見過ごせないのは、既存の出版社とは異なる学術出版活動の担い手の登場だ。その担い手とは、すでにみた研究者個人に加えて、大学図書館である。京都大学学術出版会の協力を得て京都大学附属図書館が実施している機関リポジトリでの既刊書の公開（再刊）[17]や、九州地区の機関リポジトリと連携した国立大学協会九州地区支部による『研究論文集』[18]の創刊、そして慶應義塾大学図書館による「Google ブック検索」図書館プロジェクトへの参加[19]はその代表例だろう。

これらの事例が示すように、すべての学術出版がインターネットをただ脅威と感じているわけではない。だが、様々な実践はあるものの、全体的な方向性は定まっていない。そして、学術出版社が独占してきた学術出版機能が個人や組織へと分散する傾向も見受けられる。

## 学術出版の現在と未来　―編集力と媒体力の喪失

さて、インターネットの活用を模索する学術出版だが、その本来的な役割・機能はいまどのような位置にあるだろうか。

これまで学術出版が担保してきたのは、信頼性と信憑性であった。この担保こそが、学術出版の歴史的な役割・機能であったと考えられる。学術書が学術的な品質であるという信頼性を担保してきたのは編集力であり、学術書は不変で確固たるものであるという信憑性を担保してきたのは固定性の高い紙の媒体力だった。編集力は編集者というソフトの力に、媒体力は紙というハードの力に支えられてきた。だが、ソフトの信頼性とハードの信憑性は大きく揺らいでいる。

信頼性の揺らぎは、出版の内部におけるモラルハザードと出版の外部における環境変化によってもたらされる。編集力の内部崩壊の最たる理由は、手抜きの横行、そしてそれを指弾しない出版産業の体質である。自分の身には覚えがなくても、形だけの素読みと原稿整理で自称「学術書」を刊行している学術出版社に心当たりがない、と言い切れる編集者はいないはずだ。そして、学術出版全体への信頼を落とす同業者に対して批判の声をあげた編集者は何人いるだろうか。

編集環境も変化している。インターネット上の学術的コンテンツの増加は、インターネットでだれもが読める原著の増加を意味している。これはつまり、編集の仕事が可視化されるということだ。この結果、点在する論考を集積することが多い学術書は、刊行にあたって編集力がどれほど発揮されたのか、容易に把握される状態になりつつある。

では、信憑性はどのような状況にあるだろうか。これまで紙は、圧倒的な力を誇ってきた。先行研究への言及と引用に依る学術研究にとって、紙の持つコンテンツの固定力は極めて強力であった。そして、コンテンツのデジタル化とインターネットでの公開が進む現在にあっても、紙というハードの持つ媒体力は依然、信じられている。しかし、技術の進歩は止められない。デジタル技術もインターネット技術も進歩する。信憑性を担保する紙の優位性が失われる日は遠からず訪れる。この認識を持たずに紙の力を信じることは根拠のない信仰に過ぎない。無自覚な信仰は学術出版を衰退に導くだけだろう。

## 学術出版の未来　―モデル転換と業界再編へ

信頼性と信憑性が揺らぐ現在において、学術出版のこれからをどのように描き出せるだろうか。正直に言えば、筆者には確実な効果を見込める策が思い当たらない。だが、あくまで暫定的な当面の対処療法としては、従来の売り切りモデルからの転換に一つの可能性があると考える。

これまでの学術出版は、著者と原稿の発掘から編集と刊行、そして販促と販売で完結してきた。インターネットはすでにこの一連のプロセスに入り込んでいる。インターネットでの著者発見や電子メールによる著者とのやりとりは、多くの編集者がすでに経験していることだ。また、インターネットはすでに重要な販路になっている。一部の出版社はインターネットでの出版にも取り組んでいる。

だが、これらは従来のプロセスにインターネットを取り入れたにすぎない。出版活動にとって、インターネットの可能性は従来の行為の支援や代替にとどまるだろうか。筆者はここにインターネット活用の可能性を見出す。それが上述の売り切りモデルからの転換である。つまり、ライセンス販売の世界で行われているように、製品販売の後もサポートを継続し、保守・運用の対価を求めていくというものだ。これはサービス／ビジネスモデルの大転換を意味する。リスクは生じるが、より大きなマーケット形成のチャンスとも言える。

とはいえ、これはあくまで対処療法に過ぎない。より踏み込んだ策が必要だ。すぐそこの未来を現在のようなエンドユーザー有償モデルでしのぐことはできる。だが、エンドユーザー有償モデルをとる限り、現代において重要性を増している検索エンジンの検索対象とはならない。つまり、それだけ潜在的・将来的な読者に到達する機会を失うことを意味している。他方、Google によるブック検索[20]やアマゾンによる「なか見！検索」[21]のようにエンドユーザー無償モデルをとり、進んで検索エンジンの検索対象となって読者への接触機会を拡大する大きな潮流がある。当面のその先でどちらのモデルをとるのか、あるいは第三のモデルを生み出すのか、ことは出版に限らず、様々な産業が直面している課題である。

さて、来るべき学術出版のモデルを築くにあたって、まず何ができるだろうか。最後に問題提起をして締めくくりたい。中小出版社の多さは、日本の出版産業の特徴の一つであり、学術出版も例外ではない。中小出版社の意義を認めた上であえて言えば、そろそろ中小学術出版社の統合を考えるべきではないか。キャッチーな言い方をすれば、株式会社学術出版や株式会社大学出版を設立してはどうか、ということだ。規模の経済を有効に生かせば、現在、中小学術出版社に欠けているマーケティングやリサーチ、そしてインターネットの担当者を雇用できる可能性が高まる。インターネットの現在と未来、そして学術出版の現在と未来をクロスして分析し、学術出版の未来を育んでいくためには、これは一つの有力な選択肢にならないだろうか。経験豊富な出版産業関係者には失笑されるかもしれないが、議論の一つの糸口としてでも受け止めていただくよう願っている。

(1)以上の数値はすべて『平成20年版情報通信白書』による。
http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h20/
(2) http://mixi.jp/
(3) http://ja.wikipedia.org/
(4) http://www.netratings.co.jp/New_news/News12242008.htm
(5) http://b.hatena.ne.jp/
(6) http://chiebukuro.yahoo.co.jp/
(7)『電子メディアは研究を変えるのか』勁草書房（2000）
(8)『これからホームページをつくる研究者のために』築地書館（2006）
(9) http://ci.nii.ac.jp/
(10) http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/
(11) http://www.ffiij4u.or.jp/~katote/Homef.html
(12) ttp://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/tfcontents.html
(13) http://kasamashoin.jp/
(14) 加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人』（2008）、二村一夫『労働は神聖なり、結合は勢力なり』（2008）
(15) http://literacies.9640.jp/
(16) http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/
(17) http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/49762
（一連の経緯は、鈴木哲也「知のコミュニケーションの核としての共同」（『大学出版』74,2008）に詳しい）http://www.ajup- net.com/web_ajup/074/74T4.shtml
(18) http://www.soc.nii.ac.jp/ecrk/
(19) http://www.lib.keio.ac.jp/info/index.php#130
(20) http://books.google.co.jp/
(21) http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/tg/browse/-/15749671

# いかにしてＩＴを利用するか

沢辺　均（ポット出版）

パーソナルコンピュータとインターネットが社会を大きく変化させたこと（「ＩＴ化」と呼んでおく）は多くの人と合意できると思います。これを［出版］というポイントから眺めるなら、二つの視点で切り分けるべきだと思います。

第一の視点は、現状の本の作り方や流通に「いかにしてＩＴを利用するか」、第二の視点は、「ＩＴそのものが出版を変える」ということです。「ＩＴそのものが出版を変える」というのは、本そのものの電子化やデータでの販売、販売ではない収益モデルを作り出すことなどが課題として立ち現れていると思います。版元ドットコムの活動は、主に第一の「いかにしてＩＴを利用するか」がその中心です。そしてその目的は、

① 書誌情報を版元自身がつくって、読者に、出版業界に広く公開する。

② 書誌情報をできるだけ詳細なものにする。

③ 出版事業にかんする情報の交換、ノウハウの共同した獲得。

です。要するに、自分たちの作った本を一冊でも多く売るための、共同してやるべき取り組みをやっていこう、というのが最大の目的です。

## なぜ書誌（＋在庫）情報なのか？

第一に、インターネット上に本の紹介ページがないことが、その本そのものもないことになってしまうと思うからです。ネットワークを使う人が確実に、そしてものすごい勢いで増えていて、あたりまえの道具になっているからです。

第二に、豊富な書誌情報は、その本を購入に向かわせるために有効なものであるということです。逆に言えば、書

誌情報が薄ければ薄いほど、購入動機が減ってしまうと思います。

アマゾンの渡部一文氏（書籍事業本部統括事業本部長）は「きめ細かく内容を充実させたあるアメリカの商材で、詳細ページに来た顧客の購入率が十五％から二六％に上がった事例があります。」（『文化通信ＢＢ』二〇〇九年三月二日）と言っています。これが全てに当てはまるかどうかは別にして、購入意欲を高めることは間違いないと思います。

第三は、在庫情報のことです。在庫の有無が明確なことが、書店やネット書店が販売する／しないを決める大前提になるということです。

かって書店は、在庫の有無を調べる手だてをもたなかったので、やむを得ず注文短冊を「取次↓出版社」へと回していて、出版社も「返品がくるまで保留しておくか」といったことが、私の周りにはありふれていました。しかしネットワークの発達により、新出版ネットワーク（出版VAN）や大阪屋へのメールでの在庫情報提供をとおしてアマゾンの在庫情報がかなり信用できるものになってきました。書店も手軽に出版社在庫の有無を調べることができるようになって、出版社の在庫情報提供が本の購入に直結するようになりました。さらに、提供の有無だけでなく、その正確性も購入に直結します。在庫があるのに在庫がないことになっていれば、その時点で購入意欲が大きく低下するのではないでしょうか？

## どうして書誌（＋在庫）情報なのか？

しかし、こうした書誌情報・在庫情報の整備は、それなりに手間のかかるものでもあります。特に中小零細規模の出版社にとっては、書誌情報を作ること、その情報をＴＲＣのストックブック、ＪＰＯ商品基本情報センター、取次の週報、ネット書店への情報転送など多岐にわたる情報転送先、さらには、品切れや重版・返品による在庫状況の変化に対応した情報発信を間違いなく行うためには、業界知識からこまかな作業までのノウハウが求められます。

版元ドットコムを始めた動機には、これらの煩雑な一連の作業を簡単にすることがありました。

第一に、さまざまな相手に求められる煩雑で多様なフォーマットに煩わされずに、その対応をコンピュータに対処してもらうこと。

第二に、送り先とそのタイミングを間違いなく網羅して、送付の記録までをコンピュータに管理させること。

第三に、送り先などのメンテナンスに事務局が集中して取り組む事で（あるいは各社からの情報提供を受けて）簡単にすること、として実現しようとしてきたのです。

いわば、出版活動のインフラ構築をめざしたのです。

## 出版活動のノウハウの共有

ポット出版では、新刊発行時の営業としてファックスダイレクトメールを書店に送っていて、それを重視しています。ポット出版そのものと発行したタイトルを認知してもらうことが大きな目的ですが、それだけではないと思っています。

ポット出版のような少部数出版では、並べてもらう書店にそのタイトルがフィットしていることが重要だと考えています。いわゆる「町の書店」にやみくもに並べてもらっても、ただ返品されるだけだと思っています。でも、ポット出版サイドでは、そのタイトルを並べるべき書店を認識することが非常に難しいので、書店の側に選んでもらいたいと思っています。逆に言えば、選んでくれた書店をキチッと認知して、情報提供などのフォローをしていく事が必要だと思っています。

そのキッカケがファックスによる告知です。

現在二千店ほどに（多いとは思っています）送っています。ポット出版の本を並べる意味のある書店は、せいぜい数百店だと思いますが、それをセグメントできないので対象を拡大して送っています。さて、この二千店ほどの書店ファックスリストの管理も、実はほとんどできないでいました。開店・廃業の情報を業界新聞から切り抜き、その書店に電話をかけてファックス番号を教えてもらい・・・ということを年単位でさぼっていました。三年前から、版元ドットコムで共同して、このリスト管理を開始、ファックス送信代行を始めました。共同化することで、それぞれの手間が省けると同時に、各社よりすぐりの営業担当者たちの「おすすめ書店パック」への絞り込みや、営業まわりから得た情報をフィードバックしています。

この他にも「オンライン書店とのつきあい方（講師＝文化通信社浴野氏）」「書店データ活用法ジュンク堂の「うれ太」を中心に（講師＝ジュンク堂書店営業本部木戸秀俊）」といった勉強会（版元ドットコム入門と言っています）やメーリングリストでＱ＆Ａなどを行って、多くのノウハウ共有をしています。

## 出版社のＷｅｂサイトが持つべき機能

さて、「いかにしてＩＴを利用するか」という視点から、出版社、特に小零細出版社のＷｅｂサイトは、どのような機能を持つのがよいか、ということについてです。

小零細出版社では、サイト運営に多くの人力を裂くべきではないと思います。あくまで本道は、良いと思う本を精一杯つくることだと思うからです。しかし一方では、Ｗｅｂサイトを持たないと信用すらされない、というくらいの状況になっていると思います。さらにそのサイトは、生きて発信を続けていなければまた大きく信用を低下させる、というくらいの状況になっていると思います。

具体的に必要なことは、①新刊を発行したら即、サイトにその本の情報が掲載されていること。②メールマガジンのような形式で、新刊発行・書評掲載などの情報を発信すること。③出版社スタッフの実像を想像できるようなコンテンツがあること。この三つだと思います。

第一に、出版社サイトを見たときに、半年も一年も前に発行された本が一番最近に出た本の位置にあると、なんだかいい加減な出版社だとか、あやしい感じがしませんか？また、その本の著者は不信を抱かないでしょうか？でも、日常の雑事に追われてついつい先延ばしにしてしまうことが、正直私にはあります。しかし、これは決定的にまずい。

第二に、メールマガジン（新刊案内メールといってもいいと思います）を出すべきです。サイトは見に来てもらう待ちの媒体です。これに対して、メールでの発信はこちらから能動的に働き掛けられる道具です。

私が今、Ｗｅｂサイトを見るのは、ある必要から検索をしてサイトを見るのと、ある種のメールマガジンがトリガーになって、クリックしてサイトを見るのとがほぼ半々、もしくは二対一です。

第三に、スタッフの書いたものです。これからのメディアはGoogleやYahoo!のように巨大な集客をするものと、学術出版のように特定少数の人を引きつけるものに大きく分岐していくと思っています（理由は省きます）。小零細出版社は、後者のメディア発信が中心となるので、特定少数の人との濃い関係性を作り出す事が必要です。その役割は著者に求められると当時に出版社もまた担い、特定少数の「ファン」を一人ずつ獲得しなければならないと思います。具体的にはメールマガジンの読者として獲得することに結びつけていくのですが、その入口にはスタッフの発信が必要だと思うのです。

詳細は省きますが、この三点は、版元ドットコムデータベースの利用と、メールマガジン配信システムを準備することと、HTMLを書けなくても（サイトを作れなくても）ただちょっとした文章を書ければだれもが更新できるブログ的なシステムを入れればよいのです。できれば、この三点を日常業務に組み込むようなワークフローにすることがとても重要です。

さて最後に、「ＩＴそのものが出版を変える」ということです。これもまた詳細を省きますが、いきなり電子出版だ、ダウンロード販売だ、という取り組みもまた意義があるかも知れません。しかし、これまでに書いたように「いかにしてＩＴを利用するか」にキチッと取り組むことが、電子出版などの意味やシステムの理解に近づくことであって、「いかにしてＩＴを利用するか」についての真剣な取り組みなしに、ただ電子出版に取り組めばなにか新しい地平が見えてくるものではないと思うのは、暴論でしょうか？

# 学術電子出版の新しいモデル —OCLC NetLibrary

新元公寛（株式会社紀伊國屋書店 OCLC センター）

## OCLC および NetLibrary の概要

OCLC Inc. は、情報へのアクセスを促進することを目的として一九六七年に米国オハイオ州で創設された非営利・メンバー制の図書館サービス提供・研究機関である。二〇〇九年一月現在、世界百十二ヵ国・地域の約七万館の図書館が参加・利用している。四十数年間に渡って蓄積された共同目録 WorldCat は世界最大の書誌データベースで、世界中の参加図書館で所蔵されている書誌情報が検索できるほか、インターネット上の情報資源についても検索できる。

日本では一九八六年から紀伊國屋書店が国内唯一の代理店として、OCLC の各サービスを国内の図書館に提供している。NetLibrary は世界最大手の図書館向け eBook プロバイダであり、二〇〇二年より OCLC の一部門となった。欧米の主要出版社のほとんど（約五〇〇社、うち約一〇〇社は University Press 系）が参加しており、主に学術系電子書籍二十万タイトルを世界五十ヵ国、一万六千の図書館に提供している。日本国内の導入図書館も一〇〇を超え、今後さらに市場が広がることが期待される。

## NetLibrary への和書搭載プロジェクト

紀伊國屋書店では、二〇〇二年二月より NetLibrary 電子書籍の販売を開始したが、いうまでもなく当時は英語を中心とした洋書のみであった。プロモーションを通して、和書電子書籍への強い要望が感じられ、NetLibrary システムの多言語対応を契機として、国内各出版社へのアプローチを開始した。各出版社に対して、多岐に渡る図書館向けの学術・教養書の提供を依頼し、実際に二〇〇七年十一月より和書電子書籍の提供を開始した。現時点での和書搭載決定タイトル数は六八七タイトルであり、国内八五ユー

ザ、国外の五ユーザが導入している。[1]

## NetLibraryの特徴、機能

NetLibraryの特徴を一言でいえば、質の高いコンテンツを提供したい出版社とそれを利用したい図書館を、それぞれの立場からサポートするバランスモデルを採用していることである。伝統的な出版モデルを踏襲し、情報洪水の中でこそ必要な品質の保証と、コンテンツホルダーとしての出版社の立場を尊重するモデルとなっている。機能面では特定のデバイスに頼ることなく、すべてのサービスをインターネット環境のみで提供している。導入する図書館側でコンテンツサーバなどのハードウェアを準備する必要はない。利用に際しては、紙書籍に近い利用形態を保ちながら全文横断検索・書籍内全文検索機能により、必要な情報を素早く見つけることができる。従来の紙媒体ではできなかった強力な検索機能の提供により、研究、学問への影響も少なからずあるものと予測している。

eBook間の全文横断検索例

## NetLibraryと出版社

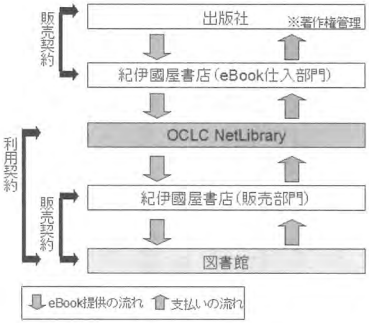
出版社は、クオリティの高いコンテンツを自身で管理・提供することが重要である。電子コンテンツに関しても外部にコンテンツ作成・管理を委ねるのではなく、自社で品質を管理し提供する必要がある。長年、紙で培われた伝統をデジタル化においても踏襲することに意義がある。一方、出版社ではデジタル化の態勢がとりづらいのもまた事実であるが、NetLibraryの和書コンテンツが増え、契約図書館が増えれば、紙媒体への好影響も少なからずあるものと予測され、電子媒体・紙媒体の両輪で出版事業自体を活性化できるものと考えている。

これまでの伝統を踏まえて自らが電子コンテンツを所有、管理できるNetLibraryへの参加を各出版社に呼びかけているが、前述のように、搭載コンテンツ数はまだまだ少なく、コンテンツの拡充が急務である。具体的には、搭載タイトル数を一年後の二〇〇九年度末までに千五百、二年後の二〇一〇年度末までに三千を現実的な目標として捉えている（現在、大学出版部協会加盟出版部でコンテンツを提供しているのは、玉川大学出版部、東京大学出版会、東京電機大学出版局、法政大学出版局の四出版部である）。

NetLibrary に参加するために出版社側で用意するコンテンツデータは、版面ＰＤＦ、検索用テキストデータおよび目次データである。いずれも一般的なものであり、他の用途への転用が利く形式となっている。

## NetLibrary のビジネスモデル

NetLibrary ビジネスモデルは、左の図のように表される。販売先は図書館のみであり、個人への販売はしない。提供タイトルとコンテンツ価格は各出版社にて設定する。販売に関しては買い切りモデルを採用しているので、これも紙書籍に近いモデルといえる。利用に際しては、紙書籍に準じて「一タイトル一アクセスモデル」を採用しており、閲覧中のタイトルは他のユーザから閲覧できない。ダウンロードおよびプリントアウトについてはページ単位で提供されるが、サーバ側で監視システムが走り、不正使用を防止している。




eBook間の全文横断検索例

出版社にとっての収支は、収入として月次の販売実績に従ったロイヤリティ、経費として初期経費としてのコンテンツ制作費となる。NetLibrary の場合、サーバへの搭載および維持管理費は不要であり、出版社にとって在庫管理、流通経費から解放されるメリットは大きいといえる。

販売については、紀伊國屋書店外商部門による全国展開は当然のことながら、米国、アジア各国、オーストラリアなどの海外市場に関しても NetLibrary および各国の代理店と協力して販促活動を行っている。

## 市場の動向など

NetLibrary の国内導入図書館数は一〇〇を超え、和書コンテンツの売上も昨年度は八千万円に達し、年商一億円が視野に入った。電子ジャーナルに続き、日本の学術市場にも電子書籍の時代が到来しつつある感があり、販売面の素地は整ってきている。繰り返しになるが、今後はコンテンツの拡充が急務となり、そのためには出版社の理解、協力が不可欠である。

大学図書館を中心とした学術市場においては、すでにインターネットを通じた電子ジャーナル、データベースサービスが普及しており、電子書籍受入れの素地は整っている。大学側でも電子書籍の有効利用のために様々な利用促進を図っているところもあるが、提供側としても既導入館に対して図書館側と共同で利用促進を推進し、利用者・図書館・出版社による「正の循環」を形成していくことは、この動きを一過性のものにしないための重要な活動である。

図書館先進国である米国のNCESの報告書によると、電子ジャーナルはもちろん、電子書籍においても、紙媒体の相対的な低下が見られるとのことである。上の表にあるように、一九九八年の五%、二〇〇二年の七%に比較して、二〇〇六年時点での学術書籍市場は、全体の六億六六〇〇万ドル中、電子書籍が十四%を占めており、今後もこの傾向は続くものと予測される。日本の学術市場においても、今後同様の現象が起こるものと予測され、国立大学図書館協会学術情報委員会報告書の「電子図書館機能の高次化に向けて2」（二〇〇六年六月）は次のように述べている。

「今後さらに、電子ブック利用についての国内外のグッド・プラクティスを収集・紹介し、教育の中での電子ブックの利活用を図ることが、ウェブ主流時代に大学図書館が生き残るための一つの方策となるはずである。」

**米国大学図書館市場規模と紙／電子が占める割合（単位：百万ドル）**

| | 1998年 | 2002年 | 2006年 |
|---|---|---|---|
| 書籍全体 | 542 | 608 | 666 |
| 書籍（紙） | 514（95%） | 563（93%） | 572（86%） |
| 書籍（電子） | 28（5%） | 45（7%） | 94（14%） |

調査対象図書館：3,617館（NCES「Academic Libraries」より）

## 最後に

前述のようにNetLibraryの国内導入図書館数は一〇〇を超え、当面の目標値としていた導入図書館二〇〇に向け、折り返し地点に入った。日本の学術市場にも電子書籍の時代が到来しつつある感があるが、まだまだ離陸したばかりの段階で、NetLibraryをはじめとする学術系電子書籍の市場への定着にはあと数年はかかるものと思われる。一方、電子書籍以外の電子ジャーナル、オンラインデータベースなどはすでに市民権を得ている。特に若い利用者においては、Webで検索できないものは資料ではないという考え方も当たり前になりつつあり、当然、図書館側でも電子資料を前提とした図書館作りを始めている。出版社としても、紙媒体のみに執着して大きなうねりから外れることのないよう、またGoogle Bookに代表される本来の出版業界の意思から外れるものではなく、出版業界主導による積極的な情報発信・意思表示の場としてNetLibraryを利用してもらえれば、低迷するこの業界の未来のためにNetLibraryは少なからず寄与できるものと確信している。今後は日本語のeAudioBook（音声資料）や文字資料と音声資料のコラボにも着手し、様々な可能性を探っていく計画であり、各出版社でのこのフレームへの参加を切にお願いしたい。

(1) http://www.kinokuniya.co.jp/03f/oclc/netlibrary/contents/nl_washo_list.xls

# 大学図書館で電子ブックを導入した意外な理由

矢﨑省三（元東京農工大学図書館副TL）

世の中に学識経験者なる種族がいるようで、新聞、雑誌、テレビなどに解説者として現れることがある。学識経験者がインタビューを受ける場所は決まって後ろに大きな書棚があり、ぎっしり本が並んだ前に座っている。

学識経験者って何者だろうかと常日頃疑問に思っていたら、某市の図書館協議会委員を頼まれ、その選出枠を見たら私が学識経験者の中に入っていたので腰を抜かしそうになった。それはともかく、もし本がすべて電子ブックになってしまったら、彼らはどこでインタビューに答えるのだろうか。

## 電子ブックの導入

東京農工大学図書館では二〇〇七年度末に電子ブック（eBook）をK書店より大量に購入した。理工系大学として電子ジャーナルは常識であるが、電子ブックの導入は初めての試みで注目された。しかし、電子ブック導入は先駆的な論理的考察なんのかんのといったよくわからない高尚な理由ではなく、ある意味安易な導入だった。でも、この安易な、いい加減な動機といったものもけっこう本質を突いているような気がする。以下理由を述べてみよう。

一つは年度末予算の調整。予算は予定してない出費などがあり、たいがい足りなくなってしまうのだが、時として余ることがある。予想していた修繕がなかったり、思いの外節約が効いたりと理由は様々だが、この年がそうだった。年度末の数百万円の資料購入はけっこう辛い。まず図書を多く注文すると一冊一冊の支払いが大変。納入された図書の整理や整備もある。なにより期限までに納本が間に合わない恐れもある、この時期職員は大忙しだ。そんな心配を一気に解決してくれたのが電子ブックだった。

二つ目は、大学教育研究振興財団（以後振興財団）から

の寄付の申し入れがあったこと。ただし、「数百万円の図書購入リストを一週間で提出できるならば」の条件が付いていた。図書館として、こうした急な事態にいつでもリスト提出できるよう準備をしておかなければならないのだがなかなか難しい。これも電子ブックをセット購入することで寄付金をいただくことができた。振興財団は、主として同窓会や教職員から寄付を集めそれを運用しているが、そこからの資金は、資料費の多くを電子ジャーナル維持費でとられてしまう現状としては、図書の購入にとてもありがたい。

ただし、振興財団の予算執行には気をつけなければならない。同窓会などからの寄付が財源であるのに、時として配慮を欠く使い方をしてしまうことがある。たとえば図書館は資料だけで成り立っているわけではなく、椅子や机、掃除道具なども必要だ。だからといって財団の寄付金で掃除道具やベンチなどを買ってはならない。寄付をしてくれた方々が、大学の振興や教育・研究に役立つことに納得して満足してくれるよう、十分に配慮しなければならない。その点電子ブックは最適で、こうしたことが次の予算獲得に大きな力となる。

結局この年度は、一千万円近い電子ブックを購入することができた。ちなみにタイトルは四六一点(和書一四四点、洋書三一七点)、フリーで読める分を含めて約四千タイトルが利用できるようになった。

ここで電子ブック購入の理由を整理してみよう。

① 急な予算、しかも年度末だった。

電子ジャーナルとは違って継続性の必要がなく、買い取りである。受入、整理、登録など作業に時間をかけられない状況でのすみやかな予算執行が必要であった。

② 二つのキャンパスで共用できる

東京農工大学は二つのキャンパスに二つの図書館がある。電子ブックであれば、購入は一冊でよい。

③ 収納が限界に達している

④「教育研究振興財団」への配慮

財団が納得できる、全学的に有効利用できるものでなければならない。財団の有力な後援者である名誉教授が家庭から利用できることを売りにする

## 電子ブック公開記念講演会

次に、電子ブック公開を記念して講演会を開催することにし、出版社による利用説明と共に財団理事長（元学長）に記念講演をお願いすることにした。もちろん次回につなげる作戦でもある。財団事務長を通じて講師の打診をしたところ、意外なことに「おれは電子は嫌えだ」と言っていたとのことだった。よく見知っている事務長なので冗談交じりであろうとは思ったが、もし断られたらどうしようかと不安になった。それでも電話でお願いすると快く引き受けてくれ講演会を開くことができた。

こうした企画は人が集まらなければ逆効果になってしまうが、当日は立ち見が出るほど盛況であった。参加者は教員が多く、学生はわずかに二人、まだまだ学生の関心は低いようだ。教員ではフィールドで作業や研究をしている人が何人もおり、なかなか図書館に来られない教員の電子ブックへの関心の高さを感じさせた。

講演は、「中国の面積を表す単位が日本のどのくらいの大きさに値するかを本で調べていたが、多くの時間を費やしてしまった。電子ブックだったら検索ができてさぞかし便利だろう」といった内容で、意外なことに理事長はあんがい電子好きであることがわかった。

## 電子ブックの利点・欠点

電子ブックがどのくらい使われているか調べてみた。公開当初こそアクセスが多かったがその後あまり使われている様子がない。利用者は電子ブックだから読みたいのではなく、読みたい資料が電子ブックにあるかどうかなので、そうした意味では電子ブックの数が全然少なく、アクセスが少ないのも当然だ。関連するもう一つの原因はＯＰＡＣに反映していないことで、技術的なこととはいえ全くもって残念だ。早急な改善を出版社、システム会社に望みたい。

図書館としての電子ブックの利点をあげると

・二十四時間いつでも、図書館が閉館でも利用できる

・しかも家からの利用も可能（名誉教授に説得力）

・複数の図書館で一冊あればよい（同時アクセスは一）

・本の内容が検索できる

・設定で書き込みが自由にできる（どうぞ存分に落書して下さい）

・返却延滞や紛失の心配がない

・保管スペースがほとんど必要ない（業務的には、受入、整理、支払いが楽で、装備、登録の必要がない）

一方、電子ブックの欠点やユーザーからの要望もまとめてみた。

【欠点】

・資産登録ができない（蔵書数に数えられないので、大学ランキングなどに不利）。

・一ページごとのダウンロードができない（利用者からの苦情はこれが一番多い）。

・価格が高い（紙の本の約一・五倍）

・ネットにつながったＰＣがないと利用できない。

・ＯＰＡＣで利用できない（農工大の場合）。

【電子ブックに望みたい機能】

・本をまたがる内容の横断検索

・リンク（漢字のふりがな、意味、解説等に）

・読みやすく携帯可能な端末の開発（できれば寝ながら、温泉での利用）

【出版社への要望】

・一冊ごとの価格を知りたい（Book Web Proで検索す

ると、個別は見積になる表示がでる）

・e-Alert Plus!の電子ブック版が欲しい

【電子ブックへの期待】（売れ筋本の電子ブックがしばらく期待できない状況で）

・絶版本の復刊

・発行部数の少ない本こそ必要（教科書、専門書、地方出版物、自費出版等々）

・これらを安価で大量に提供できるのではないか

販売会社の話を聞くと、欧米など外国に比べ日本では本の電子化に危惧感を持っている出版社が多く、特に売れ筋本の電子ブック化が難しいらしい。そういえばソニーやパナソニックの電子書籍端末はいつの間にかなくなってしまった。これは日本の特徴で、米国などでは売れているそうだ。小林多喜二の『蟹工船』が六十万部のベストセラーで驚くが、これは青空文庫で無料で読むことができる。無料なのに紙の本を買って読む人が多いのは、まだ電子ブックが知られていないのか、使いにくいのだろうか。

図書館としては、貸出しの作業が必要なく、延滞も紛失もない。自分専用の画面からは書き込みも自由。こう考えると良いことずくめであるが、それでも「私は紙でなければ納得できない」と主張する人は必ずおり、たとえるなら「ウオッシュレットのトイレは嫌いだ。紙でなければ納得できない」というのと同じかもしれない。

電子ブックの時代になったとき、図書館は存在できるだろうか。電子ブックの購入は図書館の首を絞めることにならないだろうか。私は楽観していないが、知へのナビゲータとしての図書館は存在感を増すだろうと思う。しかし、そんな時こそ司書の力量が試されはずだ。

電子ブックの時代、学識経験者はどこでインタビューを受けるのだろうか。人ごとながら気になる

# 社会の記憶を紡ぐ ――「納本」の意義

田屋裕之（国立国会図書館収集書誌部長）

## 「納本制度」六十周年

「納本制度」は昨年制度創設六十周年を迎え、それを記念し、初めて出版物の納本を受け付けた五月二五日を「納本制度の日」と定めました。

国立国会図書館は戦後間もない昭和二三年に、国立国会図書館法の成立によって設立されました。納本制度も、この法律に規定された制度ですので、国立国会図書館の歴史とともに歴史を刻んできたわけです。出版や書籍取次に携わる方をはじめ多くの方々のご協力を得て、国立国会図書館では資料の収集活動を進め、平成二十年三月末現在で、約九〇〇万冊の和書、八五〇万冊の国内刊行雑誌をはじめ、約三五〇〇万点の資料を所蔵するにいたっています。そのコレクションの根幹的な部分は、納本制度に基づいて集められています。

収集した資料は、国民共有の文化的財産として、広く利用に供するとともに、将来に向け後の世代に我々の記憶として引き継いでいきます。制度発足六十年を機会に、今回は多少エッセイ風に、納本の意義と出版界とのかかわりについて述べてみます。

## 文化財の蓄積

なぜ、わざわざ「納本」という制度を国がもつのでしょうか。国立国会図書館法には、「文化財の蓄積及びその利用に資するため」と書かれています。

戦前にも納本はありました。それは検閲を目的としたもので、内務省に納本を行いました。その一部が国立国会図書館の源流の一つである旧帝国図書館に交付され、昭和前期以前の当館のコレクションの基礎となっています。今日の納本制度は、目的も意義付けも戦前とは全く変わり、「文

化財の蓄積及びその利用」、つまり出版物を文化財として保存し、現在の、また将来の利用者に使ってもらうことをめざすものになりました。

出版物にはさまざまのことが記されます。空想や想像力によって生み出される世界もあるでしょう。日々の出来事や心の移ろいを綴った個人の記録もあります。社会的な活動からは、社会や組織の活動の記録が編まれます。調査や学術研究からは、調査研究の報告書や研究成果の論文等の学術文献が生み出されます。これらすべては、知的活動の所産、広く言えば我々共有の日本の文化財です。

## 社会に共有の記憶

どのような社会でも、過去の記録や過去から受け継いだ知識の集積があります。ミクロ的には個人の心のありようや家族の流儀に始まり、マクロ的には社会の構成、生産や流通の仕組みまで、人間の営みは社会が産み出し、受け継いでいる総体としての膨大な記憶と知識の集積と、その流通に依拠しています。しかし、物理的媒体である紙は、容易に散逸してしまいます。さらに、一箇所に集積しても、ばらばらに無秩序に集められた記録と知識の断片の集合は、それだけでは社会に共有の記憶として生きてこないのです。

納本制度は、そのままにしておくと散逸し、また無秩序に放置されてしまう、言わば「表現された国民の記憶と知識」を網羅的に集め、組織し、活用できるように整える仕組みだと考えられます。

## 出版と図書館

当然ですが、出版物なくして今日の図書館の存在はありません。出版物は、文化財としての側面と商品としての二つの面をもって、社会に流通してゆきます。ある出版物は永く商品価値を持ち続けますが、あるものは短期間で市場から消えてゆきます。商品価値の有無に関わらず、商品として流通した後でも、文化財としての価値は残ります。文化的所産を集め、保存し、組織化して、現在及び将来の利用に備える仕組みは、図書館の役割です。

学術出版は、一般的に言って比較的永い命をもっていますが、数年も経たずに市場から姿を消す本も多くあります。雑誌、新聞などは、もっと短命です。しかし、社会的記憶装置としての図書館は、市場で入手できなくなっても、利用を保証することで、出版物の文化的な価値を守ります。

## デジタルネットワークの時代に

国立国会図書館の納本ですが、本や雑誌以外に、楽譜、地図、映画フィルム（納入免除となっている）、レコードなどは以前からその対象となっていました。現在はCDやCD-ROM、ビデオやDVD、パッケージの電子ゲームなども納本対象です。さらに、今、ネットワーク系の電子

情報をどのように収集するかが課題となっています。電子ネットワーク時代の納本には、多くの課題があります。しかし、「表現された国民の記憶と知識」として、制度的な収集に取り組んでいかなければなりません。

また、図書館の膨大な資料はデジタル化して保存することが可能になっています。国立国会図書館でも電子図書館事業を進めており、また、資料保存のためのデジタル化を検討しています。一部の方からは、納本したらすぐにデジタル化され、利用者に提供される。そんなことになったら、出版界は成り立っていかないという懸念があるようです。しかし、国立国会図書館では、出版物を、まだ商品プロセスにある最中に、デジタル化して第三者に提供し、出版社や著者の生活を脅かすことなど全く考えていません。

しかし、文化財として適切な保存と利用のための手立てを講じることは必要です。出版を支えるための著者の創作活動には、過去からの記憶と知識の集積が、創造性の背景にあります。また、豊かな文化的記憶の蓄積は、健全な読者を育てます。出版界と図書館とはもっと密接に協力していいのだろうと思います。

納本について、学術出版に携わる方々に引き続きご協力をお願いするとともに、図書館と出版界がよりよい関係を築くことのできることを期待しています。

# 大学出版部ニュース

**事務局便り：二〇〇九春**

梅の名所湯島から桜の名所九段に事務所が移転したのは三月三〇日、事務所左手には日本武道館の擬宝珠と靖国神社の鳥居が見え、田安門の道沿いに万朶の桜が一望できる。

協会が有限責任中間法人として文京区湯島に事務所を開設したのは二〇〇五年、移転の二〇〇九年は一般社団法人としてスタートするが、定時社員総会を待つまでもなく、すでに法律は施行され実態としては社団法人となっている。

その二〇〇九年はすでに幾つかの大きな行事が予定され、多忙な一年となりそうだが、主な行事を列記すると以下のようになる。

**【SIBF2009（ソウル国際BF）】**

五月一三日（水）～一七日（日）

SIBF2009は日本が招待国と言うこともあり、昨年開催の「IPAソウル総会」の時点で出展を検討していたものであるが、海外図書展に大学出版部協会が単独ブースを出展し、併せて人的派遣を行うのは初の試みである。単独ブース出展では翻訳著作権交渉が行われないが反響を期待したい。

**【二〇〇九年度定時社員総会】**

五月二九日（金）

会場は日本出版クラブ会館。例年同様事業報告並びに決算報告と新年度事業計画、予算の承認、役員人事などが審議されるが、最重要の議案は「一般社団法人」への移行である。また昨年末の理事会において協会設立メンバーであった早稲田大学出版部から退会届が提出されるという残念な事態が起きたが、二〇〇九年度は関東学院大学出版会の入会が審議される。関東学院大学は創立一二五年の伝統校であり、出版会も既に三〇点を超える既刊書を持ち、経験と実績を携えての入会申請であることは心強い。

**【第一三回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー】**

八月二〇日（木）～二二日（土）

三カ国セミナーは夏季研修会との併催となる。開催場所は奈良県新公会堂。歴史都市奈良は二〇一〇年に「平城京遷都一三〇〇年」を迎え、様々な記念事業が行われる。同セミナーは三年に一度の日本開催であり、主題報告の他、パネルディスカッション「翻訳出版ワークショップ――契約と実務」が併催される。多数の参加を期待したい。

# 北海道大学出版会

▼小林真之著『**アメリカ銀行恐慌と預金者保護**』（A5判・五八八〇円）銀行恐慌および銀行再編過程を政府の公的政策（預金者保護政策）と関連させて検討。現代の金融問題にも適用可能な政策的含意を導き出す。▼呉人惠著『**コリャーク言語民族誌**』（A5判・七九八〇円）話者数四〇〇〇人たらずで絶滅の危機に瀕する言語の、名づけの背後にある民俗分類構造の特色を解明した、言語人類学的成果集。▼前田弘毅編著『**多様性と可能性のコーカサス**』（A5判・二九四〇円）コーカサスの歴史や文化を描き、民族・宗教と国家という普遍的な課題を浮き彫りにする。［スラブ・ユーラシア叢書5］▼宮本謙介著『**アジア日系企業と労働格差**』（A5判・二九四〇円）日系企業を対象とした現地調査に基づき、そのアジア進出により形成される労働市場の特殊性を解明。多層化するアジア労働市場の格差構造に迫る。▼吉田文和・池田元美編著『**持続可能な低炭素社会**』（A5判・三一五〇円）地球温暖化を中心とする地球環境劣化の要因、その対策と緩和を自然科学と社会科学の両面から考える入門書。

## 弘前大学出版会

▼『**臨床内分泌・代謝学**』須田俊宏編（B5判・三五一頁・定価五二五〇円）本書は、病態生理を考える臨床医を育てることに焦点を当て、専門医が総力を挙げて執筆した。基本的には医学部の講義の内容を網羅したもので、講義で用いられたスライドも多く含まれており、わかりやすく説明し、臨床現場で役立つよう工夫されている。内分泌疾患、糖尿病、高脂血症などの疾患群に対し、病態生理から解きほぐして、疾患の臨床所見、症状を説明し、候補疾患群を挙げて検査を組み、各疾患群を鑑別しながら最終診断に至り、各治療法の選択、予後について概説している。

▼『**Dr．中路の健康医学講座**』中路重之著（A5判・一〇三頁・定価三七八円）著者は、健康であるためには二つのことが必要であると考えている。ひとつは「正しい健康知識」、もうひとつは「健康に対する考え方」である。病気予防の情報では何が正しく、また何をなすべきか、本書では現代人が突きつけられているこの大問題を取り上げ、できる限りの分かりやすい解説が試みられている。

## 東北大学出版会

▼「ものがたり　東北大学の至宝編集委員会」編『**ものがたり　東北大学の至宝**』（A5判変型、一五〇頁、一五七五円）

一世紀以上にわたる東北大学の歴史は、文系・理系を問わず、幾多の学術研究の発展を支えた貴重な資料を学内に集めてきた。国宝や重要文化財をも含むそれらは、知の創造を重ねてきた東北大学の「至宝」と呼ぶに相応しい。研究への熱意、教育への信念がかたちとなって残る多くの宝とその物語から、東北大学が試みてきた「知の創造」のあとが浮かび上がる。

▼青井秀夫、陶久利彦編『**ドイツ法理論との対話**』（A5判、四八八頁、五二五〇円）

現代法思想はどこからきてどこへいくのか。ドイツ近世以来の法と法律家のあり方を歴史的に回顧し、自由法学・ラートブルフ・ケルゼン・法律学的解釈学・カウフマン・ルーマンなど、前世紀以降の代表的潮流を批判的に総括する。人間の尊厳・人権・寛容・リスク社会など、法哲学の最重要テーマについて、世界の学界をリードするドイツ法理論との真摯な対話を繰り広げ、今後の針路を照らす。

## 流通経済大学出版会

▼『**貨幣と市場の経済思想史―イギリス近代経済思想の研究―**』小池田冨男著（A5判・三九二頁・定価四二〇〇円）「ヨーロッパ世界経済」として成立した近代資本主義は、グローバルな貨幣・金融システムとしての古典的な金・銀の鋳貨本位制によって支えられていた。本書は一七・一八世紀の重商主義の経済思想から、スミス、リカード、フラーントンそしてJ・S・ミルに到る貨幣と信用の理論について、各時代の貨幣・信用システムの変遷とその改革をめぐる〈経済論争〉を手懸かりにし、現代の視点から、資本主義世界経済にとっての古典的金（銀）本位制の歴史的意義を解明。経済分析の対象を、単なる資源配分の価格メカニズムではなく、不断に拡大・収縮を繰り返す歴史的蓄積機構としての「ヨーロッパ世界経済」におき、景気変動過程の各局面における貨幣信用システムの役割とその理論について学説史的に分析し、預金創造等による、実体経済を上回る債権―責務関係の形成とそれを支える信用の崩壊により、「金融危機」が資本主義市場経済に不可避であることを明らかにした。

## 聖学院大学出版会

▼倉松功『**自由に生きる愛を生きる**』（四六並製、二三二〇円）

わたしたちは何にも束縛されず自由に生きることができる。しかしその自由を他者のために用いる愛に生きることが課せられている。自由と愛に生きる二つのベクトルが重なったところに本当の生き方がある。

本書は著者が東北学院大学の学長としてまた院長として、長年若い人々に語りかけてきた小説教をまとめたものである。

▼金子晴勇・平山正実編著『**愛に生きた証人たち――聖書に学ぶ**』（四六上製、二五二〇円）

旧約・新約聖書が一貫して語る「愛に生きた人々」の姿を聖書学者、精神科医、牧師、哲学者たちが明らかにする。危機に直面し、苦難に遭いながらもその意味を問い続けた人々、またイエスを裏切った人々。それらの人物が登場する聖書のテキストの意味をその現代のコンテキストの中で語りながら「愛に生きる」新しい視点を提示する。著者は並木浩一、小河陽、土戸清、吉岡光人、高橋克樹、佐竹十喜雄、ほか。

## 聖徳大学出版会

▼村井靖児著『**音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―**』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。

▼森彪著『**医における癒し―人間関係の形成のなかから―**』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病気と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粋な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスツ歌唱『**親子で楽しむ唱歌集**』（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」、「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつごう日本の歌百選」にも選定された二三曲を含む全四二曲が収録されている。

## 麗澤大学出版会

▼三上節子著『**悲哀に根ざした愛の教育観――新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究**』（五六七〇円）新渡戸とストウの生涯をたどり、彼らに通底するものを明らかにし、二人の教育者としての軌跡から、何を学ぶべきかを問う労作。

▼チャールズ・S・コケル著／大藏雄之助訳『**不都合な生命――地球2億2500万年銀河の旅**』（二三一〇円）地球は二億二五〇〇万年ごとに、すべての生命を搭載したまま、銀河系を一回転する。壮大なスケールで、宇宙・人類・微生物の生存と死滅を描く「科学読物」の傑作。

▼パキラハウス、佐藤雄一著『**すっぴんの日本語――ことのは帖**』（一三六〇円）日本語は日本文化の根幹にあたり、そして日本語は日本人の背骨である。「日本人語」なる概念のもと、日本人の生き方の本質――姿・形・情緒・美意識を探る。

## 慶應義塾大学出版会

▼『**検証　ビジネススクール**』（二一〇〇円）ビジネススクール・ＭＢＡとは何か。日本で最も伝統のある慶應義塾大学ビジネス・スクール自身がアンケートを実施して、ＭＢＡの社会的評価を問うと同時に、日本のビジネススクール・大学院64校のデータも掲載。ＭＢＡ取得を考えている人たちに必読の書。

▼池田真朗著『**新標準講義　民法債権総論**』（二六二五円）。民法教育の第一人者による債権総論の新たなスタンダードテキスト。法科大学院進学希望者はもちろん、一般の独習にも適した汎用性の高い書籍。学習ガイダンス、民法学習のノウハウ・キーポイントなどを各所に盛り込み、「紛争解決の手段としての法」「使いこなせる民法」を習得できるように工夫。

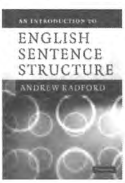
▼Ｅ・シュタインドルフ著・識名章喜訳『**シュターツカペレ・ドレスデン―奏でられる楽団史―**』（三九九〇円）ドイツ・ザクセンが誇る宮廷オーケストラ、シュターツカペレ・ドレスデン、その指揮者補佐だった著者が豊富な資料と実際の演奏活動をもとにまとめあげた四六〇年の楽団史。いぶし銀の音色の源泉をたどる！

## ケンブリッジ大学出版局

ラッドフォードの新刊

▼**Analysing English Sentences**
(Hardback 9780521516976, USD130.00 Paperback 9780521731911, USD48.00)
チョムスキーの最小主義プログラムの主要概念に基づいた構文論における最新の簡潔で明瞭な入門書。主要な概念や、それらが英語の統語論の様々な面を説明するのにどう使われるかを解説。

▼**An Introduction to English Sentence Structure**
(Hardback 9780521516938, USD99.00 Paperback 9780521731904, USD39.99)
Analysing English Sentences の要約版。




▼**Linguistics, 2nd Edition**
(Hardback 9780521849487, USD130.00 Paperback 9780521614788, USD48.00)
言語学の入門テキストとして世界的なベストセラーの一〇年ぶりの改訂版。第二版では、語用論、会話分析、最適性理論を含む、新しいセクションを追加。

## 産業能率大学出版部

▼佐原秋生著『**美食学入門―食を楽しむ知識と知恵―**』（二一〇〇円）

本書は、食文化とワインの楽しみ方、レストランでのマナー、各国の料理について、著者の実体験やコラムなどを交えて「美味しく食べることを学ぶ」意味での美食学についてわかりやすく解説。

▼産業能率大学出版部編著『**平成二一年版　徹底解説・一次試験インテリコーディネーター資格試験問題**』（二七三〇円）過去問題・解説、傾向と対策、予想問題を掲載。受験生必携書。

▼産業能率大学出版部編著『**平成二一年版　徹底解説・二次試験インテリコーディネーター資格試験問題**』（三六七五円）平成二一年版より版型を原寸にし、試験問題も本試験を再現。

▼児島敬子著『**プレゼンテーションに必要なインテリア製図**』（二六二五円）

本書は、経験の浅いインテリアコーディネーターの「経験を補う具体的な資料」として、また、これからインテリアコーディネーターを志す受験生の教材として最適。

## 専修大学出版局

▼専修大学人文科学研究所編『**人は何を旅してきたか**』（新書判・二三二頁・七三五円）古今東西の「人文主義者の多くが旅の中で思索と知識とを深めていった」ことをテーマに、歴史、地理、経済学などの視点でとりあげたもの。「インド人の跡を追う旅」「近代日本の旅と旅行産業」「日露戦争で死亡したロシア軍人の墓と記念碑を訪ねる旅」など。

▼専修大学社会科学研究所編『**中国社会の現状Ⅱ**』（A5判・二二八頁・三六七五円）現代の世界および日本を考えるにあたって中国社会の科学的研究による理解が不可欠という認識から、中国現地での実態調査も含めて進めた研究。中国の就職事情、上海の若者事情、中国の省際間資本移動性、日本企業の動向、農業・農村事情など。

▼専修大学出版企画委員会編『**改訂版知のツールボックス**』（四六判・二八〇頁・七三五円）大学生が自ら問題の解法を身につけ、問いを立て、議論して自己の考えを表現する方法を解説したハンドブック。ステップ1からステップ3まで難度をあげながら行うワークブック付き。

## 大正大学出版会

▼一島正真著『**仏教のエッセンス―「スートラサムッチャヤ」を読む―**』（四六判　一九九五円　TU選書）。大乗仏教の開祖ともいわれる龍樹の著作『経集＝スートラサムッチャヤ』（チベット訳）には、「仏がこの世に出ることは得難い」、「人身は得難い」など十一の得がたき談説が述べられている。本書の注釈者ラトナーカラシャーンティはこれらの得難き談説を解読して、四つの瞑想法にまとめ修習することを説かれた。人としてこの世に生を受けるということは得がたいことである。いま心を転換して生きる意味と喜びを見出さなければいつできるのか。仏教のエッセンスを提示する。

▼倉島節尚著『**日本語辞書学への序章**』（A5判　四二〇頁　四九三五円）

［近刊］

▼小嶋知善編『**久保田正文著作選**』（A5判）短歌雑誌『八雲』の編集にかかわりその後、文芸芸評論家として活躍し、菊池寛賞を受賞した久保田の作品（初期の小説・文芸評論、随筆など）を掲載する。また、著作目録・年譜、編者による解説を付す。

## 玉川大学出版部

▼阿久澤栄著『**特別支援教育は「特別」なの？**』（A5判・二四一五円）指導の難しい子どもの行動を理解するために、「高機能自閉症児」「アスペルガー障害児」「学習障害児（LD）」「注意欠陥多動性障害児（ADHD）」などの発達障害児の特性をやさしく解説。学校での行動特性を提示し、その支援方法を示す。

▼上田学著『**日本と英国の私立学校**』（A5判・三六七五円）日本では私立学校がますます人気だが、各学校が独自の教育を提供する私学は、競争時代に勝ち残っていかなければならない。本書では、英国の私学の組織と運営のあり方を検討。そして、その実情を参考にしながら、日本の私学経営の将来像を展望する。

▼松本茂・鈴木健・青沼智著『**英語ディベート　理論と実践**』（A5判・四七二五円）批判的思考力や論理的思考力が重視され、学校教育の場でも積極的に取り入れられている英語ディベート。実例から、どんな理論を活用したうえで戦術や議論を準備し、論証すべきかを具体的に解説。ディベート教育をリードしてきた著者陣による一冊。

## 中央大学出版部

▼黒須純一郎著『**日常生活の漱石**』（二三一〇円）明治・大正期の臣民社会に一市民夏目金之助として生きようとした「余裕派」漱石の日常性価値を斜め視点から垣間見る。

▼奥田安弘著『**国際私法と隣接法分野の研究**』（七九八〇円）国際取引から戦後補償までの多彩な研究成果の集大成。

▼中央大学人文科学研究所編『**「語り」の諸相―演劇・小説・文化とナラティブ―**』（二九四〇円）演劇、小説、祭儀、教育の専門家による「語り」の先駆的な研究成果。

▼一井昭・渡辺俊彦編『**現代資本主義と国民国家の変容**』（三八八五円）ＩＭＦなどの国際経済機構や地域経済圏の活動強化に伴う国民国家の変容を捉える。

▼斎藤道彦編『**日中関係史の諸問題**』（三二五五円）清末から戦後に至る日中関係史の知られざる諸側面を実証的に分析し、日中関係史の欠落を補う。

▼中央大学人文科学研究所編『**档案の世界**』（三〇四五円）中国はじめ各地で近年新出した石刻・官文書・写本など貴重史料を綿密に読み解く。

## 東京大学出版会

▼東大社研・玄田有史・宇野重規・中村尚史編『**希望学**』刊行開始（全４巻、１巻三六七五円、２～４巻三九九〇円）

希望とは何か。希望は単に個人の心理の問題に尽きるものではなく、社会的な次元を有し、それゆえ社会科学の対象になりうる。「希望学」は、社会科学の新たな挑戦として、東京大学社会科学研究所（東大社研）において四年間にわたって実施された全所的プロジェクトである。研究では釜石における大規模な地域調査も行われ、現代日本における希望の行方に大きな知見を得た。全巻を通じて、失われた十年から世界同時不況に至るこの時代に、社会科学の問題として希望を論じることの意義と可能性を追究する。推薦文は作家の村上龍氏。

①『**希望を語る―社会科学の新たな地平へ**』（東大社研・玄田・宇野編）

②『**希望の再生―釜石の歴史と産業が語るもの**』（東大社研・玄田・中村編）

③『**希望をつなぐ―釜石からみた地域社会の未来**』（東大社研・玄田・中村編）

④『**希望のはじまり―流動化する世界で**』（東大社研・玄田・宇野編）

## 東京電機大学出版局

▼ＮＴＴサイバーソリューション研究所監修『**ＩＰＴＶサービスの開発を例として ユーザが感じる品質基準ＱｏＥ**』（Ａ５判／二三一〇円）総合的な品質の指標としてＱｏＥ（Quality of Experience）がさまざまな分野で重要視されている。ＩＰＴＶ（インターネットテレビ）を例にとれば、画像の品質・安定性から操作画面の見やすさ，リモコンの使いやすさなどがＱｏＥとして評価されている。工学の分野においてもその評価概念は、重要な研究課題といえるだろう。

▼田中博・風間宏志共著『**よくわかるワイヤレス通信**』（Ａ５判／二四一五円）本書はワイヤレス通信システムを構成する基本技術、要素技術を説明し、ＯＦＤＭ、ＭＩＭＯなど最新の技術の基本的な考え方を網羅した。さらにこれら基盤技術上でサービスされるワイヤレス通信システムについても説明している。ワイヤレス通信システムを構成する基本技術や現在のサービスのシステムの基本的な仕組みを理解し、さらにより高度な専門領域への学習へと発展していくためのきっかけとなる一冊である。

## 東京農業大学出版会

▼『都市美協会運動と椽内吉胤』　酒井憲一著

日比谷交差点に接した、有樂ビルで産声を上げた都市美研究會と都市美協會。大正末期、彗星のごとくわが国でも都市美の実現を目指す運動＝都市美運動が…。立役者は、『都市計畫』を書いた都市美運動家ジャーナリスト椽内吉胤である。２００８年は誕生１２０年。椽内研究の第一人者の研究成果を世に問う。

平成二十年十二月／Ａ５判

二六〇頁／税込価格三六七五円

▼『途上国における農業普及とその評価』　鈴木　俊著

途上国における農村の人々の生活水準向上と福祉の増大のためには、農業技術移転や農業技術普及の効率的なシステムづくりこそ重要課題であるという半面、普及システムを正確かつ客観的に評価する手段の開発が必要であるとの考えから、試行錯誤をくりかえした結果、この評価法を作成した。

平成二十年十一月／四六判

一六八頁／税込価格一六八〇円

## 東京農工大学出版会

▼『蝶の道―Butterflies―』（Ａ４変形版・一三六頁・三七八〇円（税込み））

昆虫写真家・海野和男による蝶の写真集。本書は、世界と日本各地で、風景とともに撮影した蝶の生態写真約一二〇点をまとめたものである。

海野和男には、十才の頃に長野県で水を飲みに路上におりていた蝶たちが一斉に飛び上がる光景を見た体験がある。その写真家は、二〇〇六年にペルーのアマゾンで、無数の蝶が飛び交う路上を歩いていた。この時、少年時代の蝶との出会いが、鮮明によみがえり、そこから本書は生まれた。写真解説は、一六頁をさいて掲載。「蝶を撮り続ける」という章には、三〇年ほど前から同じコンセプトで撮影してきた写真を十二点ほど解説とともに掲載している。蝶の本格的な写真集としては、十五年ぶりとなる渾身の書である。

## 法政大学出版局

▼Ｈ・ダミッシュ／松岡新一郎訳『雲の理論』（四五一五円）中世から一九世紀末にいたるまでの西欧絵画のなかに描かれた「雲」という一連の記号表現の機能を、絵画史の観点より明らかにする。

▼Ａ・クリストファーセン、Ｃ・シュルゼ編著／深井智朗他訳『アーレントとティリッヒ』（二三一〇円）両者の往復書簡を通して、一九四〇年代のエミール・ルートヴィッヒ論争の本質に迫る。

▼Ｐ・ソンディ／ヘルダーリン研究会訳『ヘルダーリン研究』（二九四〇円）テクストの読解とは何かを限界まで考え抜いた古典。文学研究の可能性を原理的次元で考えようとする方々にも勧めたい。

▼Ｓ・ウェーバー／前田悠希訳『フロイトの伝説』（四四一〇円）デリダの親友の批評家である著者が、精神分析それ自体の来歴と葛藤の源泉を驚くべき精緻さで読み解く、脱構築批評の代表作。

▼野沢協・植田祐次監修『啓蒙のユートピア』第二巻（二三一〇〇円）マリヴォー、フォントネル、メルシエほか、一八世紀の想像力が生んだ社会改革の先駆的構想を収録した論文集、全三巻が完結。

## 武蔵野大学出版会

▼田中教照編著『**仏教最前線の課題**』（A5判二三二頁・二六二五円）仏教は現代の諸問題を解決できるのか？九人の仏教学者の共同研究「仏教・人間・科学の総合的研究」の第一段階の成果。

▼永田尚三著『**消防の広域再編の研究―広域行政と消防行政―**』（A5判二一四頁・二六二五円）「平成の市町村大合併」に連動した消防本部の収斂が一段落した今、国主導による都道府県単位の消防広域化が推進されている。広域化に伴う問題と市民の安全の行方を事例と統計から分析する。

## 武蔵野美術大学出版局

▼小松誠監修『**陶磁　発想と手法**』A4判、一二八頁、定価三三六〇円

武蔵野美術大学陶磁工房ならではの個性溢れる作品と制作実技を紹介。陶磁制作の発想について、素材・技法・機能・企業・公共のテーマごとに具体的に取り上げ、また、原料から成形技法・装飾技法・釉薬・焼成まで、制作の過程をわかりやすく総合的に論じる。数多ある陶磁本とはひと味違う、陶磁制作の基本と全体を知り、楽しさに出会う一冊。

▼十時啓悦監修『**木工　樹をデザインする**』A4判、一〇八頁、定価三一五〇円

木工を学ぼうとする人はもちろん、木工に興味のある人にぜひお薦めしたい入門書。身近な木工家具である椅子の実測を通して家具と人体の関係性を考え、アイデアのまとめ方、制作準備としての図面の重要性、モデル制作のアプローチを提案する。

また、椅子・収納家具・盛鉢の実制作過程を紹介。玩具、装身具などアイデアに満ちた木工品を手がかりに、木工の楽しさを学び、重要な自然資源である樹とともにある暮らしを考える。

## 明星大学出版部

教員養成課程新テキストから。

▼**教育行政と学校経営―改正教育基本法下の公教育制度の理念と構造**
樋口修資編著　四七二頁　二八三五円

▼**生涯学習概論**
神山・高島編　三二六頁　二六二五円

▼**現代教育改革に立つ教育の原理**
明星大学教育原理研究会編　四〇八頁　二五二〇円

▼**現代教育課程入門―知識基盤社会を生きるための学校教育を目指して**
鯨井俊彦・青木秀雄・林幹夫著　三三〇頁　一六八〇円

▼**第2版教師論―教職とその背景**
森下恭光編　二三八頁　一六八〇円

▼**第3版道徳教育の研究**
森下恭光・佐々井利夫著　二一八頁　一八九〇円

▼**第2版特別活動の展開**
鯨井俊彦編　一八〇頁　一五七五円

▼**第2版子どもの発達と環境―児童心理学序説**
塚田紘一　二九八頁　二四一五円

▼**初等算数科教育法**
小野英夫著　三一二頁　一四七〇円

## 東海大学出版会

水族館で学ぼうとする人必見の3冊

▼『**研究する水族館**』―水槽展示だけではない知的な世界―猿渡敏郎・西 源二郎編著（A5変型判・三三六〇円）水族館を基点とした研究活動を垣間見る。（最新刊）

▼『**水族館の仕事**』西 源二郎・猿渡敏郎編著（A5変型判・三三六〇円）水族館における採集、飼育、水槽展示、保護、教育・普及などの仕事と機能を紹介する。水族館のバックヤードツアー。

▼『**水族館学**』（東海大学自然科学叢書①）鈴木克美・西 源二郎著（A5判・六六一五円）水族館の定義、歴史、運営、施設と設備、機能、教育・研究・社会活動、資料、活用、世界の水族館まで、水族館に関するすべてをまとめる。

## 名古屋大学出版会

▼ミツヨ・ワダ・マルシアーノ著『**ニッポン・モダン―日本映画 一九二〇・三〇年代―**』（四八三〇円）日本の「近代性」に映画はどのように関わったのか。

▼宮地英敏著『**近代日本の陶磁器業―産業発展と生産組織の複層性―**』（六九三〇円）近代化へと至る多様な発展経路の存在を示した産業史研究の新たな叙述。

▼安元 稔著『**製鉄工業都市の誕生―ヴイクトリア朝における都市社会の勃興と地域工業化―**』（六三〇〇円）産業都市の繁栄と衰退を分かつものは何か。

▼牧野雅彦著『**国家学の再建―イェリネクとウェーバー―**』（六九三〇円）政治指導における責任とは。ドイツ国家学の達成から二人の知的営為の核心に迫る。

▼社本幹博監修 越川卓／横井豊治編『**新版 細胞診断学入門―臨床検査技師・細胞検査士をめざす人のために―**』（六三〇〇円）これからの細胞診に欠かせない知識を網羅した好評テキストの新版。

▼富岡秀雄著『**最新のカルベン化学**』（六九三〇円）近年新たな展開を見せるユニークな化学種について、研究手法、構造、反応から、今後の発展まで解説。

## 三重大学出版会

▼**地球時間の生成―経度委員会とのもくろみ1714年～1828年―**石橋 悠人著 A5 254頁 一九〇〇円

はじめに 第1章 再発見された経度 第1節 経緯度の概念 第2節 地図と空間の再検討 第3節 研究史と本書の課題 第2章 経度の追求 第1節 経度法の制定 第2節 クロノメーターと月距法の完成 第3節 経度測定法の「普遍性」 第4節 クックとトゥピア―二つの地図をめぐって 第3章 科学組織としての経度委員会 第1節 経度委員会と国家 第2節 グリニッジ天文台と王立協会 第3節 時計メーカ 第4章 経度と帝国 第1節 海軍との連携 第2節 国科学としての経度測定法 第3節 東インド会社とクロノメーター 第4節 旅する天文学者たち 第5章 再編と解散：経度委員会最後の10年 第1節 再編と極地探検 第2節 ケープ天文台設立 第3節 経度委員会の解散・結論 文献一覧

▼『**語彙 表現（上級レベル☆エッセンスⅠ、Ⅱ）**』藤田昌志著 変型B5版各八九頁（Ⅰ）。八四頁（Ⅱ）。各一一〇〇円）。

## 京都大学学術出版会

▼『**ニューロンの生理学**』D.Tritsch 他編／御子柴克彦監訳（B5判・八八二〇円）電気現象のオーソドックスな解説を含め、基礎過程となるミクロな立場からニューロネットワークまで、神経生理全体を解説した本書は、広範で深い理解と洞察を持った「脳科学の世紀」を担う、底力のある神経生理学者の養成を志して編まれたものである。

▼フェティシズム研究　第一巻『**フェティシズム論の系譜と展望**』田中雅一編（A5判・四四一〇円）モノが誘い、愛を語りはじめる―。人が主・モノが従という関係を攪乱する可能性を秘めたこの概念を問うシリーズ（全三巻）。第一巻は理論編。宗教、精神分析・性、モノ研究、そしてこれらの理論がひらく展望。

▼『**昆虫科学が拓く未来**』藤崎憲治・西田律夫・佐久間正幸編（菊判・五〇四〇円）四億年の間、度々の大変動にも生き残り繁栄する昆虫たち。その単純で強靱な構造や効率的な情報処理、厳しくも調和的な種間関係から学び、京大昆虫学の総力を挙げて、環境・食糧問題を解決する斬新な科学技術を拓く。

## 大阪経済法科大学出版部

▼**不動産問題と法―不動産問題からの法学への接近―**　田中嗣久著（一五七五円）

わが国において、不動産ほど価値のあるものは滅多に存在しない。また、私たちは一時たりとも、不動産のとのかかわりを否定して生きてゆくことはできない。

不動産には各種の権利が交錯し、そして衝突し、法学上の対立を惹起する。不動産をめぐる権利関係を考えることは、最も身近な、そして最も価値ある様々な法学上の問題を考えることである。

本書は、近年多くの裁判例が蓄積されている不動産に係わる諸問題を取り上げ、その検討を通して法学の問題を考える。

第1章　不動産の法源／第2章　私道の通行権／第3章　囲繞地通行権と建築基準法四三条／第4章　不動産賃貸借における自力救済／第5章　不動産売買における瑕疵／第6章　眺望権／第7章　借地借家法一条「建物の所有を目的とする地上権および土地の賃借権」の意義／第8章　不動産使用貸借の存続期間／第9章　判例に見る分譲マンションにおける迷惑行為／第10章　その他の問題

## 大阪大学出版会

▼石澤小枝子・高岡厚子・竹田順子・中川亜沙美著『**フランスの子ども絵本史**』（A4判フルカラー・四三二頁・二一〇〇円）児童文学科を日本で初めて創設した石澤の三〇年にわたる研究の集大成に、門下に育った俊秀がともに加わる。民衆本やエピナル版画、ABC絵本というあけぼのの時代から、ラ・フォンテーヌ、ペローらによる貴族の子どもたちの絵本、その後、絵本の出版社・作家・画家の登場、黄金時代のモンヴェル、エレ、アンシ、サンペなど、誰もが一度は読んだことのある絵本がみつかる。重厚で美しく、楽しい研究書。

▼小林茂編『**近代日本の地図作製とアジア太平洋地域―「外邦図」へのアプローチ―**』（B5判・五一二頁・七九八〇円）日本が第二次世界大戦終結まで戦争や植民地経営に向けて作製してきた地図は、「外邦図」と呼ばれる。本書はその作製過程や来歴を研究し、学術資料として再生したものである。外邦図の所在、東アジアや南西太平洋の地図の作製過程、空中写真、土地測量の記録、韓国における軍用秘図の意義など、本邦初の外邦図研究。

## 関西大学出版部

▼高屋定美著『**ユーロと国際金融の経済分析**』（A5判・二四一五円）ユーロおよびユーロ圏の国際経済における位置づけや意義を、国際金融理論および計量経済分析を用いて解明した研究書。

▼二階堂善弘著『**明清期における武神と神仙の発展**』（A5判・二三一〇円）現在の中華圏で祀られる神々は、明清期に信仰を発展させてきたものが多い。道教などで祀られる神や仙人を取り上げ、その歴史的な発展の経過を明らかにする。

▼松浦　章著『**清代内河水運史の研究**』（B5判・六八二五円）古来中国では、内陸の水運を利用した交通運輸業が発展してきたが、具体的実態は未解明であった。清朝中国の大運河や長江などにおける水運を中心に帆船航運の実情を述べている。

▼大倉雄次郎他編著『**内部統制の構築**』（A5判・三一五〇円）第一線で活躍の学者・弁護士・会計士・実務家による企業の内部統制を論じた好著。法律・監査・会計・ビジネスの観点から多くの事項について解説。

## 関西学院大学出版会

新刊

▼石原　俊彦著『**CIPFA―英国勅許公共財務会計協会**』（A5上製・二九六頁・定価三七八〇円）

▼関西学院大学総合政策学部編
K．G．りぶれっとNO．23『**基礎演習ハンドブック―演習であなたは何を学ぶのか?**』（A5並製・一三八頁・定価八八二円）

▼窪寺　俊之・谷山　洋三・伊藤　高章・平林　孝裕・義平　雅夫・赤剏　正清著『**続・スピリチュアルケアを語る―医療・看護・介護・福祉への新しい視点**』（A5並製・一四四頁・定価一三六五円）近刊

▼関西学院大学総合政策学部発行『**国際連合の基礎知識**』（A5並製・約五五〇頁・予価二五二〇円）

▼宮西　正宣・茨木　俊秀編著『**現代数理入門**』（A5並製・約三〇〇頁・予価二九四〇円）

▼赤坂　真人著『**社会システム理論生成史**』（A5上製・約一七〇頁・予価三九九〇円

## 九州大学出版会

▼山口昭三『**日本の酒蔵**』（B5判・六三〇〇円）酒造りの生い立ちと酒造技術の変遷を述べるとともに、全国の酒蔵の構造と建物配置および地域ごとの特徴を、三百点を超える豊富な図版（実測図・写真等）で解説する。日本の風土に根ざした酒造りの伝統を今日に伝える貴重な書。

▼本馬貞夫『**貿易都市長崎の研究**』（A5判・六五一〇円）新史料を駆使し、長崎の基本構造を主軸に、丸山遊女・貿易商足立仁十郎・長崎くんちといった諸様相を論じ、長崎蘭学・在長崎外国人などについて、現代的視点を含めて考察する。

▼木原溥幸『**佐賀藩と明治維新**』（A5判・六三〇〇円）幕末期には殆ど政治的な動きを見せなかった佐賀藩が西南雄藩として明治新政府で重きを成すに至る経過を明らかにするとともに、その明治維新史上の意義づけについて考察した。

▼九大アジア叢書　第12巻　福島綾子『**香港の都市再開発と保全―市民によるアイデンティティとホームの再構築―**』（新書判・一〇五〇円）。第13巻　柳哲雄編著『**アジアと向きあう―研究協力見聞録―**』（新書判・一〇五〇円）。

# 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2009年1月31日現在

| | |
|---|---|
| 株式会社朝日新聞社 | 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 |
| 亜細亜印刷株式会社 | 〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154 |
| 株式会社アベル社 | 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 |
| 尼崎印刷株式会社 | 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 |
| 王子製紙株式会社 | 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 |
| 株式会社大森印刷 | 〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1 |
| 岡本出版発送株式会社 | 〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2 |
| 株式会社協栄アドインフォ | 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-14 立花日英ビル2F |
| カクタス・ジャパン株式会社 | 〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス |
| 株式会社クイックス東京 | 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F |
| 港北出版印刷株式会社 | 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 |
| 三美印刷株式会社 | 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 |
| 三立工芸株式会社 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-4 |
| 三和印刷株式会社 | 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井字薬師堂1822-1 |
| 信濃印刷株式会社 | 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 |
| 城島印刷株式会社 | 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 |
| 新日本印刷株式会社 | 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 |
| 株式会社鈴木製本所 | 〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5 |
| 大同印刷株式会社 | 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 |
| ダイニック株式会社 | 〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F |
| 株式会社太洋社 | 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 |
| 株式会社竹尾 | 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 |
| 土山印刷株式会社 | 〒601-8305 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7 |
| 宗教法人天然寺 | 〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711 |
| 株式会社東京弘報社 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34 |
| 株式会社とうこう・あい | 〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11 |
| 株式会社日本経済新聞社 | 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5 |
| 萩原印刷株式会社 | 〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 |
| 株式会社博報堂 | 〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F |
| 株式会社平文社 | 〒170-0005 東京都豊島区大塚2-35-7 |
| 宗教法人法界寺 | 〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057 |
| 株式会社堀内印刷所 | 〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-11 |
| 株式会社毎日新聞社 | 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 |
| 株式会社遊文舎 | 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 |
| 株式会社読売新聞東京本社 | 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 |

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

# 有限責任中間法人大学出版部協会　加盟出版部一覧

**北海道大学出版会**
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

**弘前大学出版会**
〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

**東北大学出版会**
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

**流通経済大学出版会**
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001　FAX 0297-60-1165

**聖学院大学出版会**
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

**聖徳大学出版会**
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

**麗澤大学出版会**
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320　FAX 04-7173-3154

**慶應義塾大学出版会**
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

**ケンブリッジ大学出版局**
〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068　FAX 03-3219-7182

**産業能率大学出版部**
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400　FAX 03-3211-1400

**専修大学出版局**
〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179　FAX 044-911-1382

**大正大学出版会**
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026　FAX 03-5394-3038

**玉川大学出版部**
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

**中央大学出版部**
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

**東京大学出版会**
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814　FAX 03-3812-6958

**東京電機大学出版局**
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

**東京農業大学出版会**
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562　FAX 03-5477-2643

**東京農工大学出版会**
〒183-8509 府中市幸町3-5-8　東京農工大学内
TEL 0423-67-6700　FAX 0423-67-6700

**法政大学出版局**
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

**武蔵野大学出版会**
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

**武蔵野美術大学出版局**
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

**明星大学出版部**
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

**東海大学出版会**
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921　FAX 0463-69-5087

**名古屋大学出版会**
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

**三重大学出版会**
〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-232-1356

**京都大学学術出版会**
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

**大阪経済法科大学出版部**
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211　FAX 072-941-9979

**大阪大学出版会**
〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1614

**関西大学出版部**
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121　FAX 06-6389-5162

**関西学院大学出版会**
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233　FAX 0798-53-9592

**九州大学出版会**
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515　FAX 092-641-0172

大学出版七八号（二〇〇九年春）二〇〇九年五月一日発行　頒価一〇〇円（〒共）　発行所＝有限責任中間法人大学出版部協会　ISSN 0913-3305　振替〇〇一七〇-八-三八九一三一
〒一〇一-〇〇七二　東京都千代田区九段北二丁目四番一三号メゾン萬六 四〇三号室　電話〇三（三五一一）二一〇九一　E-MAIL：mail@ajup-net.com　URL：http://www.ajup-net.com/